

みちのく 武士が愛した絵画

令和2年度第3次補正
地域ゆかりの文化遺産を活用した展覧会支援事業
(国内需要喚起型)



重文 瑞巖寺本堂障壁画「櫺に鷹図(鷹に兎)」七面の内 狩野左京弟子九郎太筆 元和八(1622)年 瑞巖寺蔵



重文 瑞巖寺本堂障壁画
「櫺に鷹図」部分(七面の内)
瑞巖寺蔵

「鷹図」部分(双幅の左)
小川隆雅筆
秋田市立千秋美術館蔵
*前期展示(10/9~11/7)



「伊達吉村像」 伊達吉村筆/自賛
仙台市博物館蔵



「伊達朝宗像」 伊達吉村筆
満勝寺蔵



秋田県指定「芍薬花籠図」
小田野直武筆
秋田県立近代美術館蔵
*後期展示(11/9~12/5)

「柘榴蓮に小禽図」 小池曲江筆
寛政三(1791)年 東園寺蔵



「湖山風景図」 佐竹曙山筆
秋田市立千秋美術館蔵
*前期展示(10/9~11/7)



「花鳥」部分 佐々木原善筆
秋田県立近代美術館蔵

令和3(2021)年

10月9日(土) - 12月5日(日)

- 開館時間 ▶ 9:30~17:00(発券は16:30まで)
- 休館日 ▶ 毎週月曜日
- 観覧料 ▶ 大人 1,000(900)円 / シルバー(65歳以上) 900(800)円 / 小中高校生 400(300)円 * () 内は20名以上の団体 ※ 瑞巖寺拝観券の半分をご持参の方は100円割引

- ◆ 主催: 東北歴史博物館
- ◆ 共催: **NHK** 仙台放送局、**河北新報社**
- ◆ 特別協力: 瑞巖寺
- ◆ 後援: 多賀城市、多賀城市教育委員会、多賀城市観光協会、多賀城・七ヶ浜商工会、**仙台放送**、**マイテレビ**、**TBC東北放送**、**KHB東日本放送**、**EFM仙台**、朝日新聞仙台総局、毎日新聞仙台支局、読売新聞東北総局、産経新聞社東北総局、宮城ケーブルテレビ株式会社

※ 新型コロナウイルス感染症対策のため、日程の変更および入場制限を行う場合があります。詳しくは当館ホームページ・SNSでご確認ください。

〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1-22-1
TEL.022-368-0106 / Email:thm-service@pref.miyagi.lg.jp
https://www.thm.pref.miyagi.jp/



東北歴史博物館

TOHOKU HISTORY MUSEUM

みちのく 武士が愛した絵画

武芸に秀でた集団として成立した「武士」たちが、絵画を愛で、ときに自ら描く行為は、すぐにイメージが結びつかない方もいるかもしれません。しかし彼らの周りには、ある時は居住空間や儀礼の場を為政者として相応しく彩るものとして、またある時は家の由緒系譜を示すものとして、またある時は昔の戦を知り、学ぶものとして、武士の職能や生活上の必要性からも多くの絵画の存在がありました。泰平の世となった近世、軍事(武)のみならず政治(文)の中枢を担う存在として「文武両道」を求められた武士たちは、武芸だけでなく学問に励み、為政者の嗜みとして歌道や茶道など様々な芸を身に付けました。また、画技に優れた絵師を抱え、自らも描くことで、文化創造の貢献者としての側面も持ちました。

本展では、みちのくの武士たちが愛で、自ら描いた絵画を紹介してその魅力に触れつつ、武士たちにとって絵画はどのような存在であったのかを探ります。

展示構成

第一章 武家の肖像 —先祖のすがた—

個人の武士を描いた肖像画は鎌倉時代に現れるものの、本格的に制作され始めたのは南北朝・室町時代以降であり、室町時代後期から桃山時代にかけてその数が急激に増える。その特徴は、死後の追善のための肖像画だけでなく、長い贅を伴って武士個人や家の正統性を主張するものが見られるようになる。さらに、江戸時代前期から中期にかけて、各藩では大名の歴史書等の編纂が行われるようになると、江戸時代以前の遠い祖先の肖像画も描かれるようになる。これは、家の正当性を主張するために編纂した系図や家譜に、絵画的イメージを付加する役割があったのではないか。この章では、武家と肖像画の関わりを考える。



「伊達吉村像」
狩野古信筆/自賛
瑞巖寺蔵



重文「瑞巖寺本堂障壁画
欄に鷹図(鷹)」部分 七面の内
狩野左京弟子九郎太筆 元和八(1622)年
瑞巖寺蔵



「梅に小禽図」
伊達政宗筆
個人蔵



「留守政景および殉死者像」虎哉宗乙
慶長十五(1610)年賛
大安寺蔵(岩手県奥州市)

第二章 伊達者の愛した絵画

仙台藩は東北随一の大藩であることもあって、さまざまな絵画が生み出され、今も多くの作品が残されている。特に、他領から移封されたこともあり、初期の段階で城や寺社の造営が行われたが、初代藩主伊達政宗が京都や大坂で目の当たりにした桃山美術を仙台城や瑞巖寺などに導入したことは、東北の絵画史にとっても大きな画期である。この章では、そのような政宗の愛した絵画を初め、仙台藩の歴代藩主が描かせ、時に自ら描いた絵画を紹介する。

第三章 新たな絵画へのまなざし—秋田蘭画を中心に—

江戸時代中期の18世紀には、博物学が世界的に流行し、日本に於いても武士を初め、学者、商人、豪農に至るまで、さまざまな人々が博物学研究にいそしんだ。その中でも、大きな役割を果たしたのが各地の大名である。彼らによって、さまざまな物を写生・模写した博物図譜が制作されるが、その目的に最も合致したのが、長崎に来日した中国人画家沈南蘋(しんなんびん)の画風である。沈南蘋は、写実を旨とした細密な花鳥画で知られ、本人はわずか二年で帰国したものの、日本の絵画界へ与えた影響は甚大で、瞬く間に南蘋風の絵画が日本中に広がった。さらに、秋田藩の小田野直武は、南蘋派の技法を取り入れつつ、それに洋画の技法を融合させた「秋田蘭画」と呼ばれる領域を確立した。このように18世紀の日本では、新たな絵画へ多くのまなざしが向けられ、近代絵画への道のりが既に始まっていたのである。



重文「唐太宗・花鳥山水図(三幅対)」
小田野直武筆 秋田県立近代美術館蔵
*前期展示(10/9~11/7)



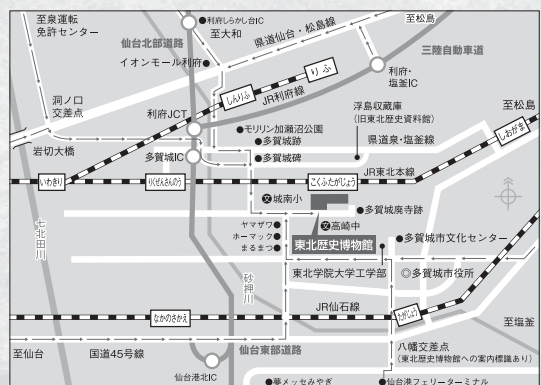
「鱒図」小田野直武筆
秋田県立近代美術館蔵



「紅毛玻璃器図」
佐竹義射・田代忠国筆
秋田県立近代美術館蔵

関連行事

- ◆国宝 瑞巖寺本堂ツアー【本展観覧者限定】*本展観覧券の半券が必要
普段は間近で見ることのできない国宝本堂内をご案内いただきます。
令和3年10月17日(日)、11月7日(日)、11月20日(土)
各日 ①11:00~②14:00~の2回(要事前申込)で、各回20名ずつ
参加無料(ただし、瑞巖寺拝観券が必要)
- ◆特別展解説(本展担当者による) *特別展観覧券が必要
本館研修室にて
毎週日曜日 11:00~11:30



- JR東北本線/国府多賀城駅下車、徒歩1分
JR仙石線/多賀城駅下車、徒歩25分、
又はタクシー10分
- お車をご利用の場合
三陸自動車道/多賀城ICから約5分
*カーナビ検索は 022-368-0101

